
輝いたときを見つめて

北川 圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輝いたときを見つめて

【Nコード】

N6712J

【作者名】

北川 圭

【あらすじ】

あたし：白田藍は、誰からも明るくて元気な女子高生だと思われていた。

校舎裏でカッターを握りしめるあたしを見ていたのは、ただひとり。

落ち葉の中、出会った彼がつぶやく謎の言葉。

「あと三ヶ月って…」

「俺もウソツキだから。白田藍と同じで」

その日から、二人のときは進み始めた。

あの日に向かって、ゆっくりゆっくりと…。

キタガワ流・携帯青春恋愛小説です。

誰もいない校舎裏で、あたしは手首にソツと刃を当てた。
昨日、ヒヤッキンで買ってきたカッターナイフ。

ピンク色の安っぽいカバーが小刻みに揺れている。
ほんの少し力を入れればすべて変わる。

あたしのツラさも泣きたい気持ちも、全部。

目をつぶって大きく深呼吸。今しかないんだから、藍！！
思い切って引いた、つもりだった。

もうあたしの脳内映像には、血だらけの制服と青白い顔で倒れこむ
あたしと、それから…。

「あれ!？」

血なんか一滴も出てない。それどころか傷跡すらない。
この、草に引っ掛けたみたいなの、皮のめくれ…？

「くくく…ひ」

どこからか必死に押し殺した、それでいて完全に小バカにした笑い
声が聞こえた。

あわてて辺りを見回すと、窓下にある低いさんに腰掛けてる学生服
が。

「な!？何よ、黙って見てるなんて! 笑うことないじゃん!!」

あたしは頬がほてって来るのを感じた。

完全に計算違い。

血まみれの白田藍が発見されるのは、もう少しあとのはずだったの

に!!

学生服の前ボタンも留めずにひらりと飛び下りた彼は、もう笑い顔を隠そうともしなかった。

ちよつと長めの髪は、たぶん染めてない。

なのに光を受けて透き通っていた。

顔立ちも輪郭も淡い。

そう、彼は何もかも淡かったんだ。

最初から。

「リスカ初めて？どこで買ったの？ダメだよ、それ百均で二本入りだろ。切れが悪いんだ。文具屋でちゃんとしたの買わなきゃ」

そう言いながらまだ笑ってる。

ネームプレートには鍵原の文字。

珍しい名前。

何年生だろう。

校内で見たことない。

まあ、これだけ生徒数が多かったら無理もないか。

初対面のくせに馴れ馴れしくあたしの横に腰を下ろした彼は、やっぱり淡い瞳であたしを覗き込んだ。

「何でリスカ？本気だったの？それともファッション？」

「バ、バカにしないでください!!あたしにだって悩みがたくさんあって!!」

たとえば？柔らかい彼の声に、あたしはつい、言うつもりもなかった言葉を口にしていった。

「たとえばって、携帯代遣いすぎってお母さん怒るし、お兄ちゃん
はあたしがせっかく入れといたドラマの録画予約消しちゃうし、英
語また追試だし、担任あたしただけ注意するし、美穂は部活終わって
あたし置いて帰っちゃうし、みんなで引いたイレブンのくじ、あた
しだけハズレだし、それから…」

人が必死に悩みを話してるって言うのに彼、鍵原さんは思いっきり
笑いこけた。

笑い過ぎて息が吸えなくなるほど。

笑って笑って、うんと笑って、それからものすごく真剣な眼差しで
あたしを見つめた。

「ねえ、本当の理由は？」

この人…。

あたしは黙って唇を噛んだ。

「い、今ので全部です!!」

そっぽを向いて言い返す。

初めて会ったのに変な人!

あたしは精一杯、鍵原さんの悪口を思い浮かべようとして、やめた。
淡い彼はあまりに優しそうで、心に思うだけで苦しくなるから。

「ウソツキなんだ、白田藍って」

何であたしの名前!?

急いで振り向くあたしのカバンを指差して、彼はまた笑った。
もちろんそこにはあたしの字で、でっかく「白田 藍・しろただー

「!!」って書いてあった。

ムカついたから、あたしもついムキになる。

「鍵原さんこそ、何でそんなにリスカのこと詳しいんですか!? やったことあるんだ、常習犯? きっとあたしなんかより、スッゴい悩み抱えて!!」

もちろんイヤミたっぷり。

一瞬、彼から笑顔が消えた…気がした。

あたしの錯覚かもしれない。

すぐにふわりとした表情を浮かべると、彼はこともなげに言った。

「俺はあと三カ月って言われてるから」

意味が分からずキョトンとするあたしににっこり微笑む。

「余命三カ月。病気でね」

息を飲むあたしの耳元に口を近づけ、彼は囁いた。

「俺もウソツキだから。白田藍と同じで」

かあつとなったあたしが立ち上がる頃には、もう彼の姿は消えていた。

行き場のなくなったカッターだけが、夢ではないと主張しているかのように。

「鍵原あ? ああ三年の鍵原歩か。あゆむ何、白田あいつと付き合う気?」

クラス一の情報通を誇る美穂にそっと訊いたってのに、彼女はバカでかい声で叫んだ。

「ちょっと、やめてよ!! 誰もそんなこと…」

あたしは必死で弁解したけど、彼女は聞いちゃいなかった。

こっちはこっちで、鍵原さんが本当にいることにさえ驚いているのに。

他校の生徒、卒業生…いっそ学校の怪談だって言われた方がまだしっくりくる。

鍵原…歩。

そっとつぶやいてみる。

「止めといった方がいいよ、白田。あの人学校で見たことないっしょ？ 一年の頃から不登校」

えっ？と驚くあたしに、美穂は声をひそめた。
どこで集めてくるんだか。

こんなときの彼女はイキイキしてる。ったく。

「入学してすぐに学校来なくなっちゃって、あとは保健室登校。うちはほら単位制だから進級はしてるけど、春の卒業は無理だろうって。それでも学校辞めないらしいよ」

どう…して？あたしの声は震えてたみたい。

大丈夫かあ？と美穂が目の前で手を振る。

「第一志望落ちたからだってさ。あの人と同中の先輩が言ってた。だったら仮面浪人でも何でもすればいいのに」

とにかく、メンタル弱い男はあんたには合わないって！！美穂はハデにあたしの背中をどついた。

「人を無神経女あつかいしてさ！繊細な乙女の白田藍様をだよ？」

あんたは悩んでる男の傷口に、塩じゃなくてメンソール系のフリスク突っ込みそー！

美穂の笑いは止まらない。

ムスツと押し黙ったところで、あたしがへこんでるだなんて誰も思わないだろう。

教室のざわめきと全く違う、鍵原さんの笑い声。

不登校：受験の失敗。

昨日の彼の言葉。

：ウソツキだから：

なぜかあたしは鼻の奥がツンとして、あわててまばたきを山ほどした。

いるわけがない。

そう思いながらもあたしは、昨日の校舎裏へと行ってみた。

かさり、いつも敷き詰められっぱなしの落ち葉たちが音を立てる。

ほら、誰もいない。

あれから新しいカッターを買う気にもなれず、あたしは一人で家に帰った。

いつも騒々しい明るい家庭。

あたしもその一部。

しよげて帰ったりしたら、熱を計られ、おかずが増え、スイーツが出され…。

ウザかった、何もかも。

明るい家族を演じるのも、いつも笑ってるのも。

そして先生に言おうがスクールカウンセラーに言おうが、ぜいたくな悩みと、取り合ってももらえないに決まってる。

誰にも見せない大きなため息をついて石段に座ろうとしたあたしは、黒い塊が地面に転がってるのを見て凍りついた。

まさか、あれは!?

「ちょっと!?! ねえ、鍵原さん!? 鍵原さんなの!?! 鍵原歩さんてば!?! うわ、どうしよう!?!」

たぶんあたしの声は、涙がかってたに違いない。

あわてて誰かを呼びに走り出そうとしたあたしのスカートが、ぐいっと引っ張られて、見事にコケた。

「ごめ…。本当に見てて飽きない」

息もたえだえに笑い転げてるのは、やっぱり鍵原さんだった。

「ひ、ひんぱいひらのにー!」

鼻を押さえてへたり込む。

彼はまだ笑ってた。

ちよっただけ寂しげに。

「具合が悪くて倒れてるのかって思って」

「フルネーム」

へっ!?

あたしは突然そんなことを言った鍵原さんをまじまじと見た。

「俺の名前知ってんなら、ただの不登校生徒なことも分かってんだろ? いつまで俺のウソ: 信じる気?」

鍵原さんなんて長ったらしい。歩でいいよ。

そうつぶやく彼が、秋の景色に透けてしまいそうで、あたしは知らないうちに彼を抱きとめていた。

戸惑い顔で目を見開く。

でも彼も避けようとはしなかった。

「最近の女子って、けっこう大胆」

くすりと笑う彼の声に、ハッとして飛び退く。

「鍵、えっと歩先輩。どうして教室入れないの?」

照れ隠しにあわててあたしが口走った質問は、直球にもほどがありすぎて、二人で思わず吹き出した。

「そりゃ、教室のドアには強力な結界が張ってあって」

「真剣に訊いたのに、歩先輩ったら!」

あたしが「歩先輩」と呼ぶたびに、分からないくらいほんのちょっとだけ彼が恥ずかしそうにする。

わかってるから、何度も呼んだ。わざと…。

「白田がリスカの訳を話したらな。本当の」

また、あの真剣な瞳。

笑われるか、呆れられる。

ぜいたくだって怒られる。

あたしが下を向くのに、歩先輩はそつと声をかける。

「笑わないし、馬鹿にもしない。でも白田にはウソツキになって欲しくない。昨日会ったばかりの胡散臭い奴に言えないのなら、それでいいから」

あたしは顔を上げると、先輩を見つめ返した。

あたしは少しだけ息を吸い込んで、話し出した。

ふだんのあたしを、白田藍を知らない歩先輩なら。

そう思ったから。

いつも元気いっぱいの白田って呼ばれてた。

明るくていいね、そう言われるから「あつたりまえじゃないですか！！」って笑って。

あたしだって、泣きたいときもあるんですよ？

でも、たいてい誰かが先に泣きじゃくってて、先生はその子に付きつきり。

あと頼むなの一言で、その子は保健室。

あたしは一人ぼっちの教室で、その子の分まで課題を片付けて。

あ、歩先輩のこと言ってるんじゃないんですよ！？

先に泣いた子、泣き叫べる子の方が勝ちなのかなって。

ちょっとしたことで下向いて、暗い顔して包帯と絆創膏して。

大人はそういう子を助ける。

あたしは負けるのも泣くのも悔しいから、平気でーすって言ってたら、今さら悲しいなんて言えなくなっちゃった。

いっつもいっつも、「元気な白田藍」の演技をしてると、家族も友達も先生も喜ぶ。

やっぱ基本、喜ばせたいじゃないですか!?

だけど、だんだんホントの自分じゃなくなっていくような気がして。

言ってるうちに、涙が出てきた。

担任がしつこく「悩んでることはないかあ?」って訊くから、ちらっと言ったことはある。

「若いうちは誰だってそうだ!!」

そう背中をどつかれてから、二度と言うもんかって決めた。

なのに歩先輩にこんな話して。

きつとくだらない悩みだと笑われるんだろう。

教室に入れない先輩の辛さに比べたら…。

そう思ったら、今度は話してしまったことが悲しくて、涙はあとからあとから溢れてきた。

「歩…先輩…ご、ごめ…んな…さい」

途切れ途切れに思いを話す。

なのに先輩は、黙って右手をあたしの頭に置いた。

「話してくれて、ありがとう」

「こんなくだらないことでリスクなんて、歩先輩怒りますよね」

あたしはまだしゃくりあげながら、ほんの少し怯えた。

本物の辛さを持つてる人には、かなうはずなんてない。

あたしがそう言うのと、先輩は淡く笑った。

「よく、辛さは比べるものじゃないと言うけど、俺はこう思うんだ」

…数え方が違うのだと…

歩先輩の言葉の意味が分からずに、あたしは涙でグシャグシャな顔を上げる。

先輩は、スポーツブランドのミニタオルで、泣き顔をそっとなでた。

「ある人はコップに何杯と数える。その人の容量を超えたら、辛さは簡単に溢れる。ここまでは分かるよな？」

塾の先生みたいな口調がおかしくて、あたしは先輩のミニタオルを口元にあてた。

「石ころみたいな固体で何個、と数える人もいる。心の入れ物を超えても、慎重に積み上げればまだ行ける」

頭にイメージがわく。ぎっしり詰まった辛さたちは、ぐらぐらしながらお互いを支えてる。

「危ういバランスで何とか保っていても、ちょっとした刺激で崩れ落ちる。白田は…」

先輩はそこで言葉を切った。

あたしは？ねえ、あたしは…。

「水風船のゴムの中に、キラキラ光るビー玉がたくさん。白田の心は柔らかくてしなやかだから、よく伸びる。それをいいことに、みんながおまえにビー玉を入れ続けてる。

どんなにおまえが強くて、いつかは破ける。箱から溢れるんじゃない。ゴムは弾け飛ぶんだ。今まで一人で辛かっただろ？」

静かな歩先輩の声に、あたしは泣いた。

もう、これ以上泣けないってくらい。

気づくと歩先輩にすっかり腕を回して、わんわん泣いていた。

会ったばかりの人。

あたしのことなんて何も知らない人。

なんで言い切れるのか、ただのなぐさめなのか、誰にでも言ってるのか。

そんなこと、どうでもよかった。

あたしの悲しみをちゃんと受け止めてもらえたことが、何よりうれしかった。

薄闇が迫る。もう帰らなきゃ。

歩先輩も同じことと思ってたみたいで、スッと立ち上がった…

「歩先輩！！」

先輩は手のひらで顔を覆うと、倒れこみそうになった。

あたしは思わず彼を支える。

…男の子なのに、なんて軽い…

吐き気をこらえてる先輩の顔色に、今度こそ助けを呼ぼうとした。それを無理やり引き止め、一つ大きな息を吐くと、先輩はあたしの肩にもたれかかった。

「…すんげえ寝不足。朝までオンゲー。ヒツキーの基本だろ？」

歩先輩…。

「じいやが運転手と待ってるんで。お先に失礼。ごきげんよう」

ふざけた言葉はあまりに軽くて、先輩には似合わなかった。でも、これ以上踏み込んだじゃいけない何かがあるようで、あたしはただ立ちすくむしかなかった。

先輩の保健室登校が終わってから迎えの来る少しの時間。気づくとあたしたちは、毎日校舎裏で座り込んでた。話すのはあたしで、歩先輩はいつだって笑い転げて…。何も気づかないようにしてたかった。

この柔らかくて淡い時間を、大事に大事にしたかった。

「もう少し、日なたに行きませんか？」

先輩はあたしのひざに頭を乗せたまま、億劫そうに首を振る。

「カビますよ！？歩先輩にキノコ生えますよ！？」

ぐふっ。

ヘンな音は先輩が耐えきれずに吹き出した証拠。

「今度、レジャーシートとか持って来よ。クッションも。お菓子とか要ります?」

「白田、おかしすぎ:運動会の家族連れか?」

呆れかえった先輩の声。

「てか、歩先輩の頭が重いんです!!耳かきでもしましょうか!?!」
ホント言うと、あたしは先輩の顔にかかった柔らかな髪と、優しそうな表情に見とれてただけど。
悔しいから先輩には内緒にしといた。

「:耳かき:喫茶:行って、みてー:」

「何アホなことやってんですか!?!先輩?歩先輩?」

規則的な寝息。また寝てる。

先輩、ネットゲーやりすぎだよ。

淡く白いその額にそっと触れる。ヒンヤリとした冷たさがあたしを不安にさせる。

あたしは、よく眠ってるのを確かめてから、少しでも顔を近づけた。
ドキドキが聞こえてしまわぬように、息を止めて。

あとちよつとで頬に触れるというとき、歩先輩は目を開けた。じつとあたしを見つめる。

急いで離れようとしたあたしの頭を、大きな手のひらでふんわり包む。

「こういう決めるところはさ、男に主導権を取らせてよ」

優しくささやくと、そのままあたしの唇に触れた。

「目つぶれ、白田」

「つうか、せ、先輩…無理」

あたしの言葉に不思議そうな顔をする。

「きついです！！こ、こんな長座位体前屈状態！！あたし、学年一カラダ硬いんですー！！」

一瞬、固まりきった先輩は、次の瞬間転げ廻った。

「あ、あの？歩先輩？」

「だ、だ、駄目だ、腹いてー！！白田、俺を笑い死にさせる気か！？」

学ランを落ち葉だらけにして、先輩はまだ笑ってる。

ムクれたあたしによりやく気づくと、今度はキチンと向かい合った。

「これなら、いいだろ？」

さわったかどうか、わからないほどの…淡いキス。
なのに伝わる氷のような冷ややかさに、あたしはいつしか泣いていた。

溶けてしまえ、氷など。

ウソツキな先輩のウソごとすべて。

あたしは自分から先輩にだきつくと、強く強く唇を押し当てた。

その日は秋というには肌寒く、大きく開いた制服の胸元がスースーした。

いつもみたいに余裕の顔で待ってる先輩が、ちょっとだけ憎らしかった。

「学生服はいいですよ！下に何着ても怒らないから！！女子の制服考えたヒト、絶対アキバ系ですね！？」

目を大きく見開いた先輩は、また笑い転げそうになった。

その腕を無理やり引っ張ると、あたしは昇降口へと向かっていった。

「おい、どこ行くだよ！？だいたい女子の制服にアキバ系関係ないし…」

「あたしは寒いんです！！保健室行けるなら、廊下くらいガマンして付き合ってください！！！」

…それ八つ当たりだし、俺寒くねえし…

ぶつくさ言う先輩の声を、わざと無視した。歩先輩も、それ以上は抵抗しなかった。

遠くから体育会系の掛け声が、うっすら聞こえてくる。

あたしたちは、誰もいない廊下の一番隅で、ひざを抱えて座り込ん

だ。

数え切れない教室のどこからも音がしない。

水族館の水槽にいるみたいで、あたしたちは黙りこくった。

「…こんなに、長かったんだ。廊下って」

「募集定員多いからな、この学校」

ポツリと先輩がつぶやく。第一志望だったって美穂の言ってた明聖は、少数先鋭の進学校だもんな。

いつもならこのバカ長い廊下に、人があふれかえってる。

それぞれ一つずつ思いを持ち、悩みを抱え、口に出せないまま笑い顔を貼り付けて。

柄にもなく難しいことを考えて、あたしまで背中がゾクツとした。

ここで長い時間を過ごすって、なんてエネルギーの要ることなんだろう。

今まで気づきもしなかった。

「これだけ長いと…先生用のイスで滑りたくなりませんか？だーっと」

緊張に耐えきれずに言ったあたしに、先輩は下を向いて苦笑いした。

「？」

「やったことあるよ、中学んとき。あとで実行犯八人、怒られたのなんのって」

くすくす笑う先輩の柔らかい横顔。

よかった。中学では普通でいられたんだ。

なのに先輩は、また口元を押さえると急に立ち上がった。
ふらつくカラダを支えようとしたあたしの手を、乱暴に振り払う。

「先輩！？ 走っちゃダメ！！ 歩先輩ってば！」

あんな蒼い顔で。

また寝不足なの！？

歩先輩！！

いつもの校舎裏で、荒い息を繰り返す。
踏み出したあたしに先輩が叫ぶ。

「来るな！！ 俺に関わるな！！」

「…歩先輩、あたし…迷惑？」

それでもあたしは近づく。先輩の心が求めてるから。

「…入りたかった。通いたかった…」

「それって、歩先輩の受けた明聖に、ってこと？」

先輩は大きくかぶりを振ると、そうじゃない、とつぶやいた。

「ただ、学校に行きたかった。毎日制服着て、定期持って、当たり前にあるはずの高校生活がしたかった！！」

…先輩…やっと腕に触れる。

歩先輩はあたしにすがりつくように、言葉を吐き続けた。

「藍、あ…い。怖い、怖いんだ。一度でも教室に入ってしまったら、誰かと関わってしまったら…辛くなる。失うことが怖くなる！！だから！！」

…あ…ゆむ先輩…

あたしのつぶやきにハッとしたかのように、先輩はいつもの表情を取り戻そう、とした。

「寒くなったらもう逢えない。部屋から出るのも面倒くさい。ここに来るのもかったるい。オンラインのイベントも目白押しだし」

「歩先輩、本当は…」

「今のが本音。中学で燃え尽きた。落ちるなんて思っても見なかったから」

「歩先輩！！」

「ウソツキな俺の言葉など、何も信じるな！！」

あたしを振り返りもせず、先輩はどんどん離れてゆく。

呼び止めることも泣くこともできないまま、あたしはただ黙って両手を握りしめた。

あんな会話がなかったかのように、いつもの落ち葉の上であたした

ちは座り込んでいた。打って変わって暖かい日。日差しが気持ちのいい日。先輩はまどろんで、あたしは…。

「…今度は何？おまえいつもへんなことやり出すな」

片方だけめんどくさそうに目を開けた先輩は、うっとうしげに顔にかかるものを払いのけた。

それは、あたしが垂らしている…毛糸玉。

「いいんです！がんばって作らないと間に合わないんだから」

「何つくってんの？てか、白田はなんか編んだことあるの？」

どうでもいいけど。そんなニュアンスで、かつたるそう。

また朝までゲーム…だったのかな。

あたしがされるのは先輩の言葉だけ。

他は信じない。

寒くなるから逢えないのなら、あたしができることはこれくらい。

「マフラー編むんです！寒くてかつたるいんだったら、これ巻いて歩先輩、毎日ここに来てください！！買うより…こうなんてか気持ちちがこもっているってゆうか…」

ちょっと恥ずかしげに言ってみたのに、先輩は目をしっかり開けてあたしの編みかけのマフラーを手を取った。

「ちょい待て。これ、俺用なの？このド派手ピンクが！？」

もう笑い出そうとしているのを、必死に先制攻撃を加える。

「ち！違います！！これはゲージつつて、試しに編んでるだけではない！！…歩先輩は何色が欲しいんですか？」

先輩はふっと笑ってから、白田が思う俺のイメージカラーでいいよ、とつぶやいた。

かっこつけて、もう！

言っではみたけど寂しげな先輩の表情に、胸がいっぱいになった。

あの日は、確かに「藍」と呼んでくれたよね…。

「そうですね。ゴールドのラメとか、パープルとか、レインボーカラーも考えてるんですけど…」

ぎょつとしたような先輩の顔…。いつもと反対にあたしの方がくすくす笑う。

「嘘ですよ。歩先輩のイメージは…薄い水色かな？」

本当は淡い透明なブルーと言いたくて、でもそれは泡と消えてしまう人魚姫みたいな気がして…。

自分勝手に悲しくなるから言わずに黙ってた。

先輩はちよつとだけ不思議そうな顔をして、それからまた笑った。

「どうでもいいけどさ、マフラーって基本長方形じゃね？何でこれでこぼしてるの？」

あたしは先輩がいじってたピンクのゲージを、ぱっと引ったくった。

それからのあたしは、休み時間も先輩と会う時間も、家に帰っても編み棒を動かし続けた。

お兄ちゃん心配そうにあたしの部屋をのぞくと、手に持ってたDVDをかざした。

「藍、大丈夫か？おまえが編み物してるなんてさ。家庭科の課題やったの、全部母さんだろ？」

無言で格闘しているあたしに、そのケースを差し出す。

「怒ってんなら、ごめんよ。こないだ消しちゃったドラマ、ダビングしてもらったから」

「いらない！そんな暇ないの！」

「いらない…って。マツジュン出てんだよ？見なくていいのか？あんなにはまってたのに」

あたしは気づいたから。

ドラマよりもっと大事で、もっとリアルな世界はたくさんあるんだってことに。

時間は、限られているのだということに。

このマフラーは、必ず仕上げなきゃならない。あの日までに。

「…あの日っていつだよ」

先輩までもが不思議そうな顔をする。

そりゃ毎日、目をほどき、また編み直し、それでも黙って棒を動か

し続けるあたしを見たら、変だとも思いかも知れない。
しゃべらずにはいられないこのあたしが。

「来週の金曜です。その日にはちゃんと渡しますから！！絶対来て
くださいよ！？ネットゲーで寝坊したとか、なしですからね！！」

「なんで、来週の？」

そう聞かれて、あたしは返答に困った。
え、だってあのそのだから、えっと…。

「あっ！そうそう！！大安だから！！」

「はあっ！？」

ぐふっという音を、なぜだか必死に先輩はこらえていた。

でっかく笑っちゃいけないとわかっているようだ。

あたしがものすごい顔して、にらんだから。

その代わり、一人でずっとくすくす笑い続けていた。

頭の乗ったひざがくすぐったい。

時が続けばいい。

このマフラーはどこまでも長く長く続いて、地球を一周するくらい
続けばいい。

先輩は気づいてるんだろうか。

気づいて…それでも知らん顔で笑ってるんだろうか。

来週の金曜日は、あたしたちが出会ってからぴたり三ヶ月め。

こうやって笑いあえるようになってから、三ヶ月たつんだよ。

先輩があたしを助けてくれたんだよ。

そして、…三ヶ月…。歩先輩の嘘がばれる日。

その日が来たって、ちゃんと歩先輩はここであたしのひざに頭を乗つけて、けらけら笑ってるに違いない。

あたしはそう信じてる。

先輩は…ウソツキだから。

まばたきをすると、こっそりつけてる「つけま」がとれそう。

それでも構わずにあたしは必死にまぶたを何度も動かして、こみ上げてくる何かを吹き飛ばそうとした。

その日、朝から最悪だった。大事な日だったのに。約束の…あの日なのに。

結局マフラーを仕上げるのに徹夜だったし、最後の飾りのところを必死で作ろうと美穂に電話してただけなのに、お母さんはあたしの携帯を取り上げた。

「あれだけ言ってるのに、あんたって子は!!」

いくらパケ放題と言ったって、通話量は減らしてるって言ったって、聞いちゃくれない。

だからあたしは犬にしたかったって頼み込んだのに、家族割りが利くからって同じ携帯会社にしなさいって言い張ったの、お母さんじゃない!!

大げんかしたところで返してくれるような母親じゃない。頑固ババアって言ってやったら、あんたの親ですからね!と言い返された。

もう、言い合う時間ももったいない。
天気予報は晴れから緩やかな下り坂。でも傘は要らない。よかった、外で会える。

本当はその先の占いを見たかったけどラッピングまで仕上げる暇はなかったから、取り敢えず材料だけを詰め込んだバッグを持って、あたしは家を飛び出した。

朝着いて美穂を探した。いない？

昨夜もそういえば元気なかった。風邪でも引いたんだろうか。
けっこう遅くまで付き合わせちゃったからなあ。

ちよつと前まで、あんなに彼氏とのことで盛り上がったのに。

昨日は一言だって近藤のこと口にしなかった。

何でだろう。

チャイムが鳴るぎりぎりに、美穂は現れた。

自分の席に着くの見計らってこっそりメールを送ろうとして…自分が携帯を持ってないことに気づいた。

もう、泣きそう。

あたしは授業なんかもちろん上の空で、とにかくあくびだけを必死に我慢し続けていた。

休み時間に美穂のところに駆け寄ったけど、いつもの彼女らしくない。下を向いてしきりにメールを打ち続けている。

すごい深刻そうに。

声を掛けるのもためらわれて、あたしはそばでぼうっと立っていた。
たぶんメールの相手は彼氏なんだろうな。

つきあい始めて半年、今までで一番気が合うって嬉しそうに言っていた。

あたしは…彼氏なんか。一緒に帰るくらいの付き合いならしたことがあるけど。

ふいに、泣きじゃくって歩先輩に抱きついたときのこととか、強引に自分から押しつけたりしたこととか思い出して、あまりの大胆さに今さら真っ赤になった。

…先輩、なんて子だと思ったんだろ。

あたしはできあがったばかりのマフラーを、袋の上からぎゅっと抱きしめた。

美穂が携帯を放り出す。驚くあたしに向けた瞳は暗くて、逆にあたしの方が泣きそうになった。

「どうしたの？美穂…」

その言葉に美穂は黙って涙を流した。
いつもの明るくておしゃべりで情報通な彼女じゃない。
あたしのラッピングなんて、どこかに飛んでいきそう。

「白田…どうしょ」

「なんかあったん？ちゃんと話してごらんよ！」

勢いづいて話しかけるあたしに、美穂はぽつりとつぶやいた。

「…できたかも、しんない」

言うなり彼女はわあっと堰を切ったように泣き出した。

よく、友だちが先に経験してると「取り残されたみたい」とか「自分と違って、もう大人なんだ」って寂しく思うって言うけど、あれはきつと嘘。

こんな非常事態には女の子は超現実的だ。

彼氏に伝えたのかとかちゃんと確かめたのかとか、気づくとあたしは必死に美穂を問い詰めていた。

とにかく、今の現状を何とかしなくちゃ。

「た：武瑠のヤツにいくら言っても、オレには関係ないって言っただけだし…、もう二週間ぐらいずれてるし…」

しゃくり上げる美穂から、ようやくそこまで引き出した。

あの軽チャラ男！！無責任にもほどがある。

「それで？検査とかしたの？もう持ってる？」

買いに行けるわけないじゃん！！

美穂の涙がまた増えた。

あたしは彼女の頭を抱きかかえて落ち着かせると「帰りに一緒に行こ！」と、無理やり笑顔で言った。

「だって白田、今日は大事な日だって…」

「ちょっとした時間なら、先輩だって待っててくれるよ。今日渡せなくても来週があるし」

そう、来週もあるんだ。いつでも渡せる。

歩先輩はいつだってあのかさかさな落ち葉の上で制服姿で居眠りし

てるか、壁に寄りかかって本を広げてるか。

絶対絶対、いつもいるのだから…。

あたしは自分に言い聞かせると、放課後を待って美穂の背中を押し
た。

「…こんなに値段するんだ、検査薬って」

大型スーパーの一角にあるドラッグストアの片隅で、あたしたちは
立ちすくんでいた。

とても手にとってじっくりなんて見られない。

何度も何度も、キットの置いてある場所を通りすがって、値札を横
目で見ただけ。

それからいったんフロアを出て、エスカレーターそばのベンチに座
る。

二人で財布を開けて所持金を数え始めた。

値札には確か二千いくらって書いてあった。

こないだ洋服を買っちゃったのと、毛糸代が思いのほか高くて、あ
たしのキルティングの財布には千円札が一枚。

お小遣いをもらえるのが来週。なんて間が悪いんだろ。

美穂も同じくらい。

「もっと安いのがあるかもしれないから、よく見てみようよ」

元気づけるつもりで言ったあたしに、美穂はさすがのような視線を向
けた。

首を横に振りながら…。

「無理…、もう無理。とてもあの店に行けない。怖くて行けない。買ったなんて誰かにばれたら！」

「じゃあ、別のところ行く？みんながあんまり行かなそうな店」

それでも彼女は下を向いて首を振り続けた。

「美穂！しっかりしなよ！ここではつきりさせなきゃ大変でしょ？もしホントならもつとお金かかるんだよ？近藤にだってちゃんと話して、出させなきゃ無理なんだよ？」

「これ以上あいつに言える訳ないよ！まだ決まってもないうちから、あんなに冷たいのに…」

明るくてしっかり者だと思ってた美穂。

こんなに繊細で脆い面を持ってるなんて…。

そうだよ、あたしだって美穂から見たら、みんなから見たら、カッターを手に持って震えるようなタイプには…とうてい見えないよね。

みんな何かを抱えてる。

表には出さない、出せない自分を抱えてる。

胸がいつぱいになった。

あたしはすくっと立つと、美穂の千円札をそっと引き抜いた。びっくりしたように顔を上げる彼女ににこっとして見せた。

マフラーの入った袋を彼女に押しつける。

「大丈夫、あたしが買ってきてあげる。誰に見られたって平気。美

穂はここで待ってな！」

本当は心臓がばくばく言ってたんだけど、平気なフリをしてあたしは歩いた。

さっきの売り場はもうイヤになるくらい覚えたから、今度は真っ直ぐそこへ向かった。

…制服を着替えてから来ればよかったかな。

そりゃ、明日になればもっと遠くの店にだって買いに行ける。

でもその分、美穂は今夜一晚をどんな気持ちで過ごすんだろう。

そう思ったら、とても明日になんて言えない。言いたくなかった。

意を決してさっきの値札の辺りに立つ。

誰にどう思われたっていい。

思い切って手に取ってみる。

生まれて初めて見る検査葉は、ピンク色の箱が眩しかった。

種類がたくさんあって、どれにしたらいいかわからない。

店員に訊くわけにもいかない。

二千いくらの箱を、ひっくり返してみる。

…三回用…なんだ、これ三本入ってるんだ。だから高いのか。

その近くを漁る。三本も要らない。

ほら一本だけのもある。ほっとした。千円もしない。

あたしは敢えて他のものをカモフラージュに買おうとはせず、それだけを持ってレジに向かった。

下を向く方がかえって恥ずかしいような気がして、平然とレジの人に差し出す。

事務的に値段を言われ、千円札を一枚だけ。

レシートなんか持ち帰れる訳がない。

何ごともないように脇のボックスに放り込むと、わざとゆっくりと

美穂の方へと歩いていった。

「白田…」

目に涙をいっばいためて、それでも気丈にあたしを見つめる美穂に笑いかける。

大丈夫だよって。

「ほら、行つといで！待っててやるから！」

背中をどつく。いつもみたいに。

美穂がその場から離れても、あたしの方が落ち着かなくて袋をぎゅっと抱きしめた。

現実的：そう、行動力があるのはいつも女の子の方。

だけど、もし本当にできてたとしたら、これから美穂はどうすればいいんだろう。

あたしにできることって何だろう。

バイトしてるわけじゃないあたしたちに、千円単位の買い物にためらうほどのあたしたちに、掛かろうとしている金額はでかすぎた。どこか遠くの世界の出来事だと思っていたのに。

どうやって近藤に話を持って行って責任取らせたらいいんだろう。

そこまで考えてやっと、あたしがはなっから墮ろすことしか頭になかったことに気づいた。

ふいに目が回るくらい気持ち悪くなった。

片方の手のひらで口元を押さえる。

あたしにとって：見慣れた仕草。

そう思ったらもっともっと苦しくなった。

これは美穂のことなのに。
そう思いこもうとしたけどダメだった。
命なんだ。

一つの命がかかってるかも知れないことなんだ。
どうしよう、どうしよう。

誰か助けて！

美穂が帰ってくるまで、すごく長い時間に感じた。
逆に時が止まってしまったみたいにも思えた。

何も役にも立たない。何の力もない。

あたしは、あたしたちはただの女子高生…。

悔しさが先に立って、涙を意地でも抑える。

泣くもんか。唇を噛む。

美穂がやっと姿を見せた。どこか放心状態。

まさか…まさ…か。

「美穂!？」

勢いづいて問いかけるあたしに、…だいじょぶだった、ホッとした
ら来た…って。

「よかったあ」

あたしたちは人目もはばからず、抱き合って泣き出した。
緊張がいつぺんにほどけて、今度は涙が止まらなくなった。
よかった、よかった…本当に。

「…ありがとう、白田。ごめんね付き合わせちゃって」

「大事な親友の一大事なんだから、当たり前だって！」

「でも…白田だって、今日は大切な日なのに…」

その言葉に、あたしは大急ぎで立ち上がった。

そうだった！歩先輩！！

あわてて時計を見る。

今から走って学校に戻れば、まだ迎えの時間には間に合う。

『絶対に、この日だけは遅刻しないできてくださいね！』

念を押したのはあたし。

今日は…特別な日。

ごめ！もう行く！！言い残して外に出る。

そのあたしの顔に、ふいに当たる雨粒。

「あ、雨！？」

確かに下り坂だとは言ってた。

でも、雨が降るなんて一言だって！！

待ってないよね？

せめて校舎の中に…ああでも、建物の中は耐えられないんだ先輩は。降り出したのが今なら、先に帰ってって連絡しよう。

携帯を取り出そうとしたあたしは、カバンのポーチに手を突っ込んで蒼くなった。

…そうだ、今日あたし携帯持っていない…

番号もアドレスも、通信でやりとりしたから覚えてない。

メモも取ってない。

今日はお母さんパートだから、家には誰もいない。

…どうしよう。

とにかくあたしは走り出した。

学校へ。あの場所へ。

いつもの校舎裏の、落ち葉が音を立てて迎えてくれるあたしたちの場所へ。

どうか歩先輩、もういないで！ちゃんと帰ってて！
じゃなきゃせめて、傘でも差してて、お願い！

校門をくぐり、花壇を飛び越え、必死に走り続ける。

腕を振るたびにマフラーが入った袋が音を立てる。

今日渡せなかったって、来週も再来週もその次も、いつだってあるんだから！！

心の中で、うんと大声で叫んだ。時は続くんだ。

歩先輩はまたあたしのひざで笑いこけて、今度はこの淡いブルーのマフラーを巻いて！

校舎裏には、黒い影。傘は見えない。

息を切らせてあたしは立ち止まった。

…歩先輩のバカ。融通が利かないにもほどがあるって…

ポケットに手をつっ込んで、先輩は立っていた。
いかにもかったるそうに振り向く。

「…先輩、歩先輩。傘ぐらい差してください。ってか、こんな雨降ったら、さっさと帰ってください…」

「ばーか…おまえが…言ったんじゃん。絶対この…日は待ってろって。どうせ…マフラー間に…合わなかったん…だろ？そんな…ことだろうと…」

いつもみたいに笑いだそうとした歩先輩の声は、それ以上続かなかった。

ゆっくりと倒れ込んでゆく先輩の身体を、そのときのあたしは何も動けずただ見つめるしかなかった。

次の瞬間、弾かれたように走り寄ったあたしは歩先輩を抱き止めようとした。

いくら軽くても、それは無理。

濡れて湿った落ち葉の上に、あたしはへたり込んだ。

先輩の制服の上から体温を感じたかった。

温かな優しさを…感じたかった。

なのに冷たい、冷たい…なんて冷たい…雨。

「いやあ！！先輩！歩先輩ったら！！誰か来て！！助けて、お願い！！」

いくつかの足音をぼんやりと耳にかすめながら、あたしは歩先輩をぎゅっと抱きしめ続けていた。

悲しいときって涙も出ない。

本当なんだなってぼんやりと思う。

病院の白い廊下で、あたしは掛けてもらった毛布をぎゅっと握りしめ、堅い椅子に座り続けていた。

まるで透明人間になったみたいに、誰もがあたしに気づかない。

ばたばたとした足音だけが通り過ぎる。

一枚のドアで隔てられた病室の中で、何が起きているのかわからないまま。

うつむくあたしに、そっと何かが差し出された。

あわてて顔を上げると疲れ切った、それでも優しげでやわらかそうなほほえみを浮かべた女の人が立っている。

たぶん…歩先輩のお母さん…。

「これ、あなたのでしょうか？救急隊の方が渡してくれたのだけけど」

それは見慣れたあたしの…マフラーの袋。
のろのろと手を出し、そっと受け取る。

「…ごめ…ん…なさ…い。あたしのせいで歩先輩…」

「あなたは何も悪くないんだから、どうか謝らないで」

先輩によく似た、ふわりとした淡いトーン。

責める口調でないのが伝わる。

それがなおさら辛かった。

隣、いい？

先輩のお母さんはゆっくりと腰を下ろした。

「いいんですか…、歩先輩のそばについていなくて…」

「今、薬で眠っているわ。お医者さん方も見てくださっているし。それに、もともとね、先週には入院する予定ではいたのよ。でも珍しくあの子が、どうしても今日まで学校に行くんだと言い張って」

ふっと笑みをもらすその仕草が先輩に似ていて、あたしはその言葉に胸がツキンとした。やっぱり…あたしのせい。

「あなたが、白田さん…でしょう？ありがとうございます」

微笑む彼女にあたしは目を見開いた。

先輩はあたしのこと…言ってたんだ、お母さんに。

「俺のことをさ、先輩って呼んでくれる子がいるって、あの高校入って初めてだってすごく喜んでいたのよ。いつもあなたの笑顔とお話を聞くのが楽しみだったって言って。学校行ってよかったって」

「過去形で言わないで…ください。まだまだあたし、歩先輩に聞いてもらいたいことたくさんあるんだし。先輩に学校来てもらわないと困るんです！」

一瞬、お母さんは口をつぐんだ。

無理に笑おうとしてそれでも、片手で口元を押さえてしまった。

先輩がいつも…やるように。

酷いこと言ってる。

あたしは心のどこかでわかってた。

でも、誰か一人くらいバカみたいに信じていてもいいでしょう！？

袋からごそごとマフラーを取り出す。

淡い淡い、青のグラデーション。

変わり毛糸にしたのは、その方がボロが目立たなくていいという美穂の貴重なアドバース。

お母さんに差し出す。

「歩先輩って、ワガママなんです。けっこうあたしにも言いたい放題言ってる。寒いからヤダとか、朝までネットゲームして眠いからって人を枕代わりに居眠りばっかして。…これ、渡したいんです。この白田の心がこもったマフラーならあったかいから、冬でも学校に来られるようにって」

手作り…なの？

お母さんはもう涙声だった。

それでもあたしは胸を張って、はい！あたしが作っただけです！歩先輩のためにって笑って言った。

もったもった、酷いことを言っているってわかった。

本当はあたしにも…。

お母さんはそっと堅い椅子に座り直した。

肩を落として、それでも気丈に微笑んだ。

「素敵な色ね。あなたが選んでくれたの？」

はい！歩先輩っばいでしょ？

あたしの空元気が病院の廊下に響く。

お母さんは、あとで直接あの子に渡してあげてとつぶやいた。

「あ…会えるんですか？」

「今のところ症状は落ち着いているから。もう何度も繰り返しているのよ。だから本当にあなたのせいではないの」

淡々としたお母さんの言葉が続く。

泣くこともせず。

本当に悲しいとき辛いとき、人は泣けない。

泣いたら少しは楽なのに。

あたしは…あたしは。

「…明星学院の試験日に、最後の科目であの子倒れて。その日初めて病気がわかったの。それまでどうして気づいてあげられなかったのか、悔やんで悔やんで。あの子は具合が悪いのをずっと黙っていたみたい。どうしても行きたいからと自分で資料を集めて選んだ学校だったから」

明星とうちじゃ…あまりに違いすぎる。

それで校舎にも教室にも入りたくなかったんだろうか。

下を向くあたしにお母さんは首を振った。

「そんなことじゃないのよ。あの子が明星にこだわったのは大好きな部活が強かったから。ただそれだけなの。それでもどうしても高校に行くといい張って、二次募集をあわてて探して」

募集定員の多い…学校。

広すぎてずっと逢えなかった。

あんなに人が多くて広すぎるのに…出会ってしまった。

今になって、ふたりは…。

「だけどね、一日教室に座っていられるだけの体力は、もう到底あ

の子にはなくて…」

どれだけ行きたかったんだろう。

きつと誰かとつながっていたかっただろうに。

たくさんの方だちに囲まれ、にぎやかな生活を送り、勉強と部活と…恋愛と。

高校生活は忙しい。

忙しくて辛くてしんどくて面倒くさくて腹が立って、でもそれもみんな、あの場所にいるからこそできること…なんだろうか。

三年生なのにきれいな制服。

それを落ち葉だらけにして笑ってた先輩。

教室に入って一度でも友人ができてしまったら、失うことが怖いと震えた先輩。

あたしには…声を掛けて助けてくれた…先輩。

気づくと涙があふれていた。

あたしはあわててマフラーをもう一度袋に押し込める。
濡れたら大変。

それほど涙は止まらなかった。

まだ、泣き足りない。先輩のこと、何も知らない。

だからだからあたしの涙は次から次へとあふれ続けた。
顔を覆ってしゃくり上げる。

歩先輩のお母さんが、そっと肩を抱いてくれた。
ありがとう歩のために、と。

あたしは泣いた。

あの日、自分が辛い先輩の前で流した涙などほんの少しだってわかるくらい。

あたしを本当のあたしの心の姿を見つけてくれた歩先輩が、こんなにも苦しんでいるのに何もできない。

悔しいよ！

こんな、こんなことってないよ！！

お母さんがあたしに廻した手に力がこもる。

ただ黙って抱きしめてくれた。

あたしはその胸の中で小さい子みたいに泣いた。

ちよっとだけ思った。

本当は先輩のお母さんも、こうやって泣きたいのかなって。

救急治療室のドアが開く。

お母さんが立ち上がり、白衣の人と話し合う。

そしてそっと振り向いてあたしを目で呼ぶ。

あたしは顔を掛けてもらった毛布でごしごし拭くと、両手でほっぺをばんばん叩いた。

泣いてる場合じゃない。

このマフラーを渡して、約束を取り付けるんだから。

それに、ちゃんと告ってないし。

ああ、それもなんかヤダ！

どうせなら歩先輩から告らりたい！

必死に極上の笑顔を作ると、あたしはまたマフラーの袋をぎゅっと抱きしめた。

たくさんの機械と管。

訳のわからないノイズ。

それが歩先輩を包み込んでいる。
かきりと乾いた音を立てる落ち葉ではなく。
柔らかな秋の陽ざしではなく。

でも、もうあたしの顔に涙はなかった。

だってこれから、あたしは生まれて初めて大好きな人から告られなきやならないって、壮大な野望を持ってるんだもの。

お母さんに促されてベッドに近づく。

先輩はそっと目を開けた。

思わずあたしもホッとした。

いかんいかん、気を緩めたらまた泣き出しそう。

「…歩先輩」

先輩の口元が微かに動いた。

あたしは耳を近づける。

あの日の頬の熱さを思い出してちよつとだけ赤くなる。

「何ですか。この白田に言いたいことがあるんでしょ？ お約束の流れ、わかってますよね？」

自分でもずるいと知ってたけど、わざとふざけた声で先輩を睨み付ける。

ちよつと甘さを含んだ瞳、上目遣いと軽いまばたき。

これが大事だってみんな言ってた。

わざとらしくなく誘いかけるように。

男子の方が断られないって確信が持てるようになって。

なのに先輩は、そんなあたしのさりげない誘いなんか気づきもしなかった。

頬を膨らませる。

「…バカ。おまえ空気読め…よ…」

先輩はいつもみたいに笑おうとして、うまく行かなかった。
代わりにもれる、切なげなため息。

「歩先輩の方こそ、空気読んでください。大事なところは男に主導権持たせろだなんて言っておいて。いつもウソツキなんだから」

…嘘つきのパラドックスだな…

先輩の遣う言葉はいつも難しい。
なのにあたしの胸にすんと落ちる。

ウソツキだから、人の心をその言葉で納得させちゃう。
ウソツキだから…。

「必ず…嘘し…か言わ…ない男が…いた。『私は…嘘つきである』。
彼は…嘘つき…か否…か」

とぎれとぎれの、塾の先生みたいな講義。
あたしは思わずそれをさえぎる。

「先輩は、歩先輩はウソツキです。だから初めて逢ったあのときの
言葉も…」

「俺は嘘なんか言っていない」

そう一息で言い切ると、そっと目をつぶる。
何もかもを諦めたかのような、淡い淡い輪郭とふんわりとした髪と、

透き通るような肌の色と。

あたしは近くに置いてあった消毒用のボトルから、乱暴にアルコールを自分の手に吹き付けた。

そしておもむろに、先輩のまぶたを無理やりこじ開けた。

「な！何すんだよ！！」

かすれてもさすがにあわてふためいた先輩の声。

お母さんが目を丸くしてるのがわかる。

それでもあたしは、ちっとも気にしなかった。

「あたしには！あたしは先輩が…歩がここにいたことがすべて。他は何にも関係ない！あ…歩がちゃんといってくれること、それだけが本当。そうでしょう？あたしが、あなたのことを好きでいるこの気持ちだけが…」

もう、勝手に涙があふれていた。

それをぬぐうこともしないで、あたしから気持ちを伝えた。

どちらからなんて関係ない。

今じゃなきゃ伝えられない。

今じゃなきゃダメだから。

あたしの心がしなやかな水風船なら、歩は淡いシャボン玉。

触れただけですっと消えてしまう。

でもね、その輝きは他のものには決して真似ることができない。

虹色に光るきらめきと、暖かな陽ざしを美しく反射させて、シャボン玉は空を舞う。

両手でそっとそっと、包み込んであげるから。

あたしがちゃんと、抱き止めてあげるから。

どうかどうか…いつまでも消えないで。

歩の手がゆっくりと伸びて、あたしの頬に届く。

ひんやりとした指先。

それでもあなたはここにいる。

約束の三ヶ月が来ても、あなたはちゃんと生きている。

だからあたしは、あたしだけは信じる。

「生き…ろって、強要するつもり…か？白田ってホント、ひでえヤツ」

「当たり前です。この白田藍の初恋が実るかどうかの瀬戸際なんだから。数少ないチャンスは、ちゃんものにしておかなきゃ！」

くすつと少しだけ笑って、歩の手が頬をなでる。

愛おしそうに。

それがこんなにも嬉しいなんて。

「治療、きついんだぜ？根性無し…のおまえには…まず…無理」

「この期に及んで、イヤミですか？それこそいい根性してますね、先輩って」

…名前で呼べよ…呼んでよ。

歩の優しい声。

あたしは彼の手の上に自分の手を重ねる。

「だいたい！治療の方法があるんだったら最初から言ってください！ホントにいじわるでウソツキなんだから！」

「…成功率、二割を切る手術…。その後も…ずっと続く、強い副作用の…化学…療法。受ける自信なんかなかった。俺は本当は恐がり
で弱虫で…」

二割！？あたしは息を飲んだ。

こわばった顔を悟られたくなくて、ああだけど、きつとこの指先には伝わってしまう。

そのことが悔しくて。

唇に力をこめる。

嘘でも笑っていれば幸運は舞い込む。

昨日の占いはそう言ってた。

今朝のテレビは…見ないで良かった。

今はそれだけを信じたい。

「あたし！こう見えてもくじ運いいんです！」

…イレブンのくじ、全部外れるくせに？

声にならない息だけの言葉。

歩の微笑み。

本当にいじわるなんだから。

「今日のために！…歩のために取っておいたんだから。あたしの幸運もラッキーアイテムも勉強運も恋愛運も、健康運も何もかも！！全部歩にあげる…あげるから、だから！！！」

見つけ合って、目だけでキスを交わした。

あたしたちだけしかわからないように。

あたしたちだけには、わかるように。

「ちゃんと帰ってきてください。あたしは待ってますから。じゃないと、この…白田の自信作が可哀想です。中間も追試も全部諦めて、ひたすら編んだ愛情たっぷりのこのあったかいマフラーが！」

…バーカ。

歩が笑いながら目をゆっくり閉じる。

少しずつ力の抜けてゆく歩の手を、あたしは必死に握りしめる。

あきらめない、あたしだけは。

ううん、違う。あたしたちだけは。

うつすらと再び開いた瞳は、あたしを真っ直ぐに見つめた。

「俺から…も…う一度、きちん…と…言わせてよ。藍が…好きだ…と」

あたしは何度も何度も、うなずき続けた。

明るい陽ざしが教室に入り込む。

あたしの新しい席は窓際。朝一番から居眠りしろってことだわ。

三年への進級で、美穂は特進コースへの変更届を出した。

もう少し広い世界で勉強してみたい。たくさん人と触れあいたい。

そう言って…今は彼氏も作ってないみたいだ。

「中学もそうだったけど…。高校なんて、ホント、狭いところに押し込められてるなって思ったんだよね。難しいこと考えるのはガラジ

やないけどさ」

そう笑う美穂は、前よりずっと大人びて見えた。悪い意味じゃなくて。それはきつと、成長のしるし。

「それよか、あんた医療短大受けるって本当？」

その言葉の響きがくすぐったくて、あたしは首をすくめた。

今から猛勉強して入れるかどうかなんてわからない。

専門学校も考えたけれど、まずはやるだけやってみようかなって。

「アマイもんじゃないってことくらいは想像つくけど、あたしができることを少しでもやれたらなってさ」

病院にはたくさんスタッフが働いているなんて、ちっとも知らなかった。

看護師さんだけじゃない。看護助手さんやいろいろな検査技師さん。他にも療法士さんとか福祉士さんとか、ああもう、種類がありすぎて何が何だか！

でも、それでも…どんな形でも関わりたいと思った。生命を救う現場の一人として…。

救われる命と、目の前で失われる…命。

そして誰かに託す命もあれば、その思いが受け継がれてゆく命も。

悲しい涙と嬉しい笑顔を全部抱え込んで、あの白い建物の中では今日も忙しく動き回ってるんだ。

あたしが今まで知らなかった世界。知らずに済んでいた…世界。

いのち芽吹く春に、あたしは思い切り息を吸った。

「まあ藍には、専属の家庭教師がいますからねえ。どんだけ成績がどべでも、何とかなるんじゃない？」

あんたは別の教室でしょうが！？美穂の背中を乱暴に押す。
どべで悪かったわね！！今日からは違うんだから、そう…今日からは。

美穂と入れ違うかのように開かれた教室のドアには……。

「先輩！！先輩！！」

あたしの大声に、クラスメイトとなったみんなが一斉に振り向く。
あたしにとって、彼らの中には知っている顔も知らない顔もある。
でも、今ドアに立っている彼を知る者は…あたしだけ。

歩は、はにかんだ笑顔で一歩めを踏み出した。教室の結界は、ほら、こんなにも簡単に破けたよ。

「白田、おまえなあ。思い切りイヤミだぞ、それ」

ドアの一番近くの席に着いた歩は、頬杖をついてあたしを見た。
柔らかい声と輪郭は変わっていない。

でも、彼の持つ生命の光…限りなく白に近い淡い淡いブルーは……
今はすでに色濃くはつきりとした藍色へと変わっていた。
急いで駆け寄り、もっと大声で騒いでみせる。

「だって、先輩には違いないじゃないですか。生年月日ばらし
ましょうか？あ、入学年度言った方が早いかな」

バーカ。口元だけで歩が言い返す。

前からの友だち数人が、白田この人は？とおずおず訊いてくる。

「へへん、あたしのか・れ・し！」

はああ！？みんなのぶっ飛んだ反応と、またもぐふつという変な音。あ、歩まで机に突っ伏して笑いをこらえてる。

揃えた脚の上には、そっと広げられたあたしのマフラー。

まだ肌寒いときもあるからと、いつも病室で使っていたように膝掛け代わりに。

「転校生？」

「ばか、それを言うなら編入生だろうが」

「てか、白田に似合わないすぎじゃね？」

ひそひそ声の噂を、黙れ！と一喝する。

ついでにあたしまで、入ってきたばかりの担任に叱られた。一番うるさいのはおまえだと。

落ち着かない雰囲気の中、ショートホームルームが始まる。

最初に顔なじみの担任が一言添える。

「鍵原は病気で長いこと休んでいて復学したばかりだ。当面はSH Rだけの参加になるが、みんなのフォローを期待しているからな。頼むぞ」

ごついけど気の優しい担任は、ぐると見渡すと笑顔を向けた。そう、まだまだ治療は続く。闘いは始まったばかり。

でも負けないことも、あたしたちは知っている。
歩とあたしはそつと見つめ合って、うなずいた。
大丈夫、って。

「あのお」

あたしをよく知る前のクラスのヤツが、おずおずと手を挙げる。

「鍵原：くん？あの、彼が白田さんの彼氏だって、何だか白田が勝手にねつ造して言いふらしてるんですけど、いいんでしょうか」

三年進級しての最初の質問がそれかい！？

教室が騒然とする中、あたしはすくつと立ち上がって、ホントですと宣言した。

先生はもう既に硬直状態だし、みんなの視線と言えは…。

全員の注目が歩に集まる。

きっとこの学校で初めて、たくさんの人に見つめられたんじゃないだろうか。

歩の顔が引きつる。あたしは、てかあたしたちは息を飲んだ。

げほっ！ごほごほ！！

彼が咳き込むのに、担任はあわてて歩のそばへ駆け寄ろうとした。

「大丈夫か！？おい！鍵原！！」

歩があのと時のように、口元を片手で押さえる。
それでも我慢できずにぐふっというくぐもった音。

次の瞬間、とうとう耐えきれなくなった歩は……。

息も絶え絶えに笑い出した。

「ぐふっ、げほ。くくっ、あは、はは」

ひたすら笑い転げる歩を、みんなはあっけにとられて見るばかり。

「…す、すみません。あの…」

笑顔が消えない歩のむせかえる声。

苦しんでんのか笑ってんのか、紛らわしい、全く。

そう言いながらも担任も苦笑い。

歩はそうっと立ち上がると、みんなを見渡してこう言った。

「白田さんは、藍は…生きることをあきらめてた俺を、ここまで引っ張り上げてくれた。今まで、決して教室に入れなかった。誰かと関わっても俺は長くはないから、人を悲しませるのも自分が悲しむのもイヤだと思ってた」

静まりかえる教室に、歩の声がしみてゆく。

「だけど、そうじゃないんだ。たとえ一瞬でも誰かとつながれることができたのなら、それは大切な想いとなる。それをつなげてゆけばいい。いつまでも、いつだって…」

ほうっと息を大きく吐くと、歩は言い添えた。

「というわけで、白田は俺の……最愛の彼女ですが、何か？」

えっー！？似合わねー！！イケメンなのにー、もったいねー！！
教室中になぜか怒号が飛び交う中、涼しい顔で歩は付け足した。

「てか、こんなメンドくさくて小うるさいヤツを相手にできるの、俺ぐらいしかないっしょ？」

わざーとらしくポーズを決めてみせる歩に、みんなはどっと笑った。
思い切りにらんでやると「先輩と連呼した罰だ、バーカ」と口先だけで言い返された。

春の教室に笑い声があふれる。
何度でも言ってあげる。

いのち芽吹く春。

これからあたしたちはずっと、一緒。

廊下で待つはずの、歩のお母さんにこの声が届いたかな。
歩は今、大勢の友だちの中で笑い合っているよ。

輝いたときは今、輝くときと姿を変えて……。

た。

＜了＞ ご愛読、ありがとうございます

北川圭 Copyright ? 2009 - 2010
i t a g a w a A l l R i g h t s R e s e r v e d k e i k

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6712j/>

輝いたときを見つめて

2010年11月16日11時18分発行